

「よき臨床医をめざして—全人的アプローチ」

The Effective Clinician

His Methods and Approach to Diagnosis and Care

Philip A. Tumulty 著

聖路加看護大学学長 日野原 重 明 訳
芽ヶ崎徳州会病院副院長 塚 本 玲 三

東京慈恵会医科大学学長

阿 部 正 和

これは、まことに素晴らしい本である。私が若い医師および医学生諸君に、日頃どうしても言っておきたいことが余すところなく述べられている。いや、私が思いつかなかったこと、しかし非常に大切なことまでが盛り込まれている。ありがたいことである。著者のタマルティ教授の学識のみならず人柄に触れた思いがする。教授はウィリアム・オスラー先生の再現ではないかとも思われたのである。

わが国の若い医師の方々は、検査データの読みには優れた能力を発揮するが、こと診察技術となると米国の医師より、かなり劣っているとよく言われる。しかも面接技術が下手だという批判もある。診察の相手は、病いに悩む人格をもつ人間であって、病気ではない。そうすると、わが国の医師は人間への接し方が未熟だということになるのか。それはいったい何故だろうか。私は、医科大学における医学教育のあり方に反省すべき点があるのではないかと思う。もしそうだとすれば、医学教育に従事する指導者の姿勢、診療の態度に改めるべき点がありはしないかということになる。ここに、本書を、まず医学教育の指導者の方々

に、まずはともあれ読んでいただきたい、と願う理由がある。もちろん、若い医師および医学生諸君にとっても必読の書である。

今、“病気を診ずして病人を診よ”ということがよく言われる。重装備医療の時代に突入している現在、医師と病人との間のコミュニケーションが稀薄化しつつある。私たちの前にあるのは病気ではない。そこには病いに悩む人間がいるのである。その人間は意識があり、精神があり、人格をもつ社会的存在である。私たちの診療の相手は、正にその人間なのである。当たり前のことだが、本書を読めば、このことが一層明確になるであろう。

本書は、病気の診断学ではない。病人の診断学である。どこまでも病いに苦しむ人間中心の診断学である。私たちは、医学生諸君に医学と術を伝えることはできても、医の心、あるいは医の道を伝えることは難しい。この難しい問題を解く鍵が本書には秘められているように思われる。本書は、時代を超越した不朽の名著と言ってもよいだろう。

臨床医とは何であろうか。タマルティ教授によれば、病気を診断したり、治療したりすることが臨床医の

本来の任務ではないという。人間が病気から受ける衝撃全体を効果的に取り除く目的で病人をマネージする人だという。正に至言である。本書は病人中心の診断学そのものと言ってよいだろう。

特に強調すべき点は、ゴチック書体で示されている。私は、まずこの部分だけを拾い読みした。その部分のみからも私が得た効果はきわめて大きかった。その後全文に目を通したが、私の予想をはるかに超えた収穫を得たのである。

本書の内容をいちいちここに紹介することはしない。まずは一読することをお薦めしたい。

“不合理には分別心を、癡癡持ちには平静な心を、大人げない振る舞いには知恵をもって対処する”ことが力説されている。オスラー先生の再現といったのも、これらの箴言を読んだためなのである。

なお、Johns Hopkins 医科大学の著名な先達の方々のスケッチとプロフィールが本書の随所にみられる。これらを見たり、読んだりすることも、まことに楽しいことであった。

本書は臨床医のバイブルといっても過言ではない。御多忙の中を翻訳の労をとられた、私の敬愛してやまない日野原重明先生、また協力された塚本玲三先生に心からの謝意を表したい。

ともかく1人でも多くの医学生諸君および臨床医の方々が本書を手にお読み下さることを切望したいのである。

A5判 322頁 図12 写真1 1987
¥2,800 円300 医学書院 刊